

人数で農業生産を担わなければいけない時代の訪れを見越したもので、動力(牛馬・機械)を効率的に使える大規模区画を整備する先見性のあるものでした。しかし、博士の提唱した区画(短辺30m×長辺100m、面積30アールを基本とする)の耕地整理理論の実現は、当時の土地制度(寄地主制)のもとでは不可能でした。理論が示されてから60年を経た昭和30年代後半、全国各地での大規模圃場整備で採用された「標準区画」こそが博士の提唱した耕地整理理論の実現でした。



ハチとの出会いと別れ



渋谷駅前の「忠犬ハチ公」銅像

博士は、かねてから秋田犬の子犬を飼いたいと望み、大正13(1924)年に当時の秋田県大館町から子犬が上野家にやってきました。しかし、ハチと呼ばれたこの子犬との生活は、わずか1年余りの短いもので、博士は53歳の時に、大学での講義の後に学内で倒れ急逝します。帰らぬ主人を待ちわびるハチ公の物語が有名となるのは、博士が亡くなった7年後、渋谷駅前のハチ公像の建立は9年後のことです。

近鉄久居駅東口緑の風公園の博士とハチの像



上野英三郎博士が遺したもの

博士の著書『耕地整理講義』は、その後の農業土木を学ぶ人々にとって長く「バイブル」として位置付けられる著作となりました。大学で教壇に立つ一方で、農商務省兼任技師として全国各地での技術指導を通じて多くの技術者を育てた博士ですが、その人数は3,000人ともいわれます。その中には、大正12(1923)年9月に起きた関東大震災の後、首都東京の復興「帝都復興事業」を支えた技術者も多く含まれ、土木測量技術が農業分野以外でも大変大きな役割を果たし、震災復興に生かされたことがうかがえます。

今、全国各地の圃場整備を終えた水田をみる時、そこには博士の理論が基礎となって見事に整理された規模の区画や用水路、排水路が広がっています。博士の農業土木学者としての功績の大きさを知ることができ、「日本農業土木学の父」と評価される業績が刻まれています。



上野英三郎博士ゆかりの地

博士の墓碑は東京青山霊園にあります。竹柵に囲まれた脇には「忠犬ハチ公の碑」が建てられ、博士とハチのつながりを感じることが



久居元町法専寺にある博士の墓碑

ることが出来ます。また、東京大学農学部の正門脇にある「農学資料館」には、博士の銅像が設置され、博士の業績の大きさがしのべられます。

津市内では、久居元町法専寺に墓所があり、久居小戸木町の小戸木神社の地域の略歴を記した記念碑の上部には、博士の揮毫による篆額文字が刻まれています。

そして、昨年(2012)の10月20日、近鉄久居駅東口にある緑の風公園に、新たなランドマークが誕生しました。全国初の博士とハチが寄り添うこの銅像は、博士の帰りを待ち続けたハチと、ハチを我が子のように愛した博士の思いを形にした像です。博士の偉大さを感じるとともに、ふたりの絆が私たちに温かな気持ちにさせてくれます。

